

## 発言4-2 高齢者たちの「なかまの家」ふれ合いサロンで

近藤京子

名古屋市北区 清水なかまの家主宰



### 要旨

清水なかまの家は平成8年4月に名古屋市北区にオープンして、今年で17年目を迎えました。なかまの家では週4日届けるお達者弁当の配食サービスとふれあいサロン、月1回開くお達者ひろばの会食会、3つの事業をやっています。

ふれあいサロンは毎週火曜日午前10時から午後2時まで、昼食をはさんでお喋りしたり歌を歌ったりする交流の場で、毎回平均25～6名の参加者がいます。

サロンの特徴は参加する人みんな、対等な立場でありたいという考え方です。この当たり前の事で、互いに依存しない関係が生まれ、必要な時には自然体で互いを支え合えるという不思議な力が発揮されます。

「ひとつ釜の飯を食べる仲」と言いますが、そこには目に見えない信頼が生まれて、たくさんのバリアを溶かす力があるように思います。

他都市からなかまの家のサロンの様子を見に来られる事がよくあります。ある時、お客さまからご挨拶を受けたので、それでは私たちも自己紹介しましょう、と自分の名前と100から年齢を引いた数を言うルールで順番に回しました。「私は3歳です」という高齢の人も何人もいました。皆が一巡し終わった時、「他の施設ではパスする人が多いのに、ここはどなたもパスされる人がいませんね」と驚かれ、逆に私たちが驚いたこともあります。

一緒に作って一緒に食べて17年。安心すると、人はたくさん喋ります。安心すると、人の話を聴く余裕が出てきます。なかまの家のサロンは、それは賑やかです。

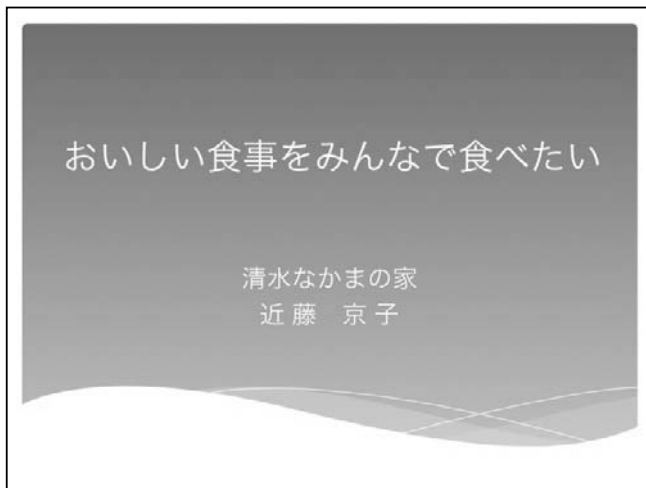


図1

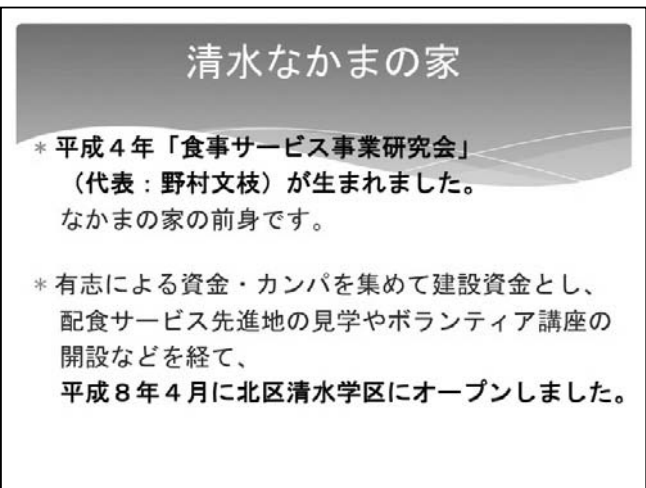


図2

おいしい食事をみんなで食べたい、清水なかまの家、近藤京子です。



図3

清水なかまの家です。平成4年、食事サービス事業研究会が生まれました。なかまの家の前身です。融資による資金、カンパを集めて建設資金とし、配食サービス先進地の見学やボランティア講座の開設などを経て、平成8年4月に北区清水学区にオープンしました。

これはなかまの家の全景です。この上に7階建てのビルがあります。その一階です。約100平米がなかまの家の活動拠点で、ビルの2階にはグループホームがあります。5人の人たちが暮らしています。南北に細長い厨房です。

今、調理をしているところです。お弁当を作っているところです。



図5

これはできたてのお弁当をみんなで包んでいます。男性ボランティアもよく働いてくれます。お弁当は袋に入れて、日付用紙を入れて、最後は輪ゴムで留めて配っていきます。



図4

お弁当を届けているところ。77歳の利用者さん。この方は、近いところで和



お弁当を届けているところ  
77才の利用者。この方は、和菓子職人さんでした。  
渡す男性は、80代。

図6



ガラス戸越しに見える協働キッチン

図7

菓子屋さんをやってらっしゃいました。渡す男性は80代。老々でやっています。

ガラス戸越しに見える共同キッチン。共同キッチンというのはどういうものかという、住民同士が食事やお弁当を作って配って、地域の人々、特に高齢者をみんなで支えましょうという、そういう気持ちが込められた共同キッチンです。手前のところは、サロンの利用者さんです。

これは、もやしの根っこを取っているところです。自分達が食べるときも、そしてお達者弁当に入れるもやしなんかも、サロンがお手伝いをします。



今日は調理のお手伝い  
お弁当づくりのお手伝いもします。

図8



食卓の準備も後片付けも自分たちでします。

図9

食卓の準備も後片づけも、みんなでやります。「大丈夫？」とみんなが心配するけれど、重たいものを持って運んで下さいます。とにかく作って食べる、みんなでやっています。

お食事風景。私が写っています。ご飯は大盛り、普通、小盛りの希望を取りますが、やっぱり大盛りを食べる人は元気です。私も大盛りです。



お食事風景  
ご飯は、大盛り・普通・小盛りの希望をとります。

図 10

これは自然体で支えたり、支えられたり、この後お話ししますが、この自然体が私たちにとって大切なものです。

これは最後の画面ですね。干支飾りをヒイラギの枝につけているところ。ヒイラギは毎年、配達ボランティアさんが届けてくれます。手作りの干支飾りがついたヒイラギは、みんながもらって帰ります。これをもらって帰ると、脳血管障害が出なかったという人が何人かいらっしゃって、とても霊驗あらたかです。



“干支飾り”をヒイラギの枝につけているところ  
ヒイラギは毎年、配達ボランティアさんが届けてくれます。  
手づくりの干支飾りがついたヒイラギは1本ずつ、貰って帰ります。

図 13

くお達者広場の会食会、この三つの事業をやっています。



ずっと、ご夫婦で参加しています。  
左の方は、元調理ボランティアでした。

図 11



自然体で支えたり、支えられたり

図 12

ということで、画面は終わりますが、ここからは私の話しです。清水なかまの家は平成8年4月に名古屋市北区にオープンして、今年で17年目を迎えました。なかまの家では週4日届けるお達者弁当という名前のお弁当と、配食サービス、ふれあいサロン、今日お話しするテーマです、ふれあいサロン、そして月一回開

ふれあいサロンは毎週火曜日午前10時から午後2時まで、お昼ご飯をはさんでお喋りしたり、ゲームをしたり、脳トレをやったり、歌を歌ったり、そんな交流の場で、毎回平均25～6名、多いときは31名くらいの方が集まります。

このサロンの特徴というのが一つありまして、それは対等な立場で参加したい、対等な立場でいたいという考え方です。この当たり前のことが、互いに依存しない関係が生まれて、必要な時には先ほどの様な自然体で互いを支え合うという、不思議な力が醸し出されるということです。「ひとつ釜の飯を食べる仲」と言いますが、そこには目には見えない信頼が生まれます。そして、たくさんのバリアを溶かす力があるように思うのです。

よその都市から私たちのサロンに見学にお見えになる方がいらっしゃいます。ある時、他都市から見学に来られた方が、「みなさんこんにちは、私たちは～から来ました」と紹介して下さいました。だから、そのご挨拶を受けたので、それでは私たちも順番に自己紹介しましょう、ということになりました。自分の名前だけ言うのではあまり芸がないということで、自分の年齢を100から引いた数を言うというルールで回しました。「私は3歳です」とおっしゃる方がいらっしゃった。そのように高齢の方たちが何人もいました。ちょっと前の話です。みんなが一巡し終わった時に、そのお客様が言われました。「ここはすごいですね」と言われたのです。「なんでですか」と聞いたら、「自己紹介にパスをする人が一人もおられませんでした」。つまり、97歳の方から若い20代の人まで、誰もパスする人がいなかった、という風にして驚かれました。だから、逆に私たちも驚いた訳です。それがやっぱりバリアを溶かす力と繋がっているのではないかと思います。

一緒に食べている信頼感と安心感ですよ。一緒に作って一緒に食べて、17年間を過ごしてきましたが、人は安心するといっぱい喋ります。安心すると、人の話を聴くことができます。だから、なかまの家サロンは、そういう安心感が漂っている。その中心にあるのが、やっぱり一緒にご飯を食べていることかなと思います。

発表を終わります。ありがとうございました。

※一部重複写真・表を割愛させていただきました。

## 近藤京子 履歴

‘43年生まれ。23歳まで滋賀県立近江学園で暮らす。’79年名古屋市認定手話通訳者。  
‘91瑞穂区で仲間とボランティアグループかがやきを結成。瑞穂区障害者関係団体連絡会代表。  
’96年清水なかまの家ふれあいサロンを主宰。